

町家通りの空気を感じてもらい、「ほっ」としてもらいたい



ぎやらりの宮郷
 宮郷 素子さん 宮郷 晴督さん

この通りで生まれ、この通りで育った晴督さん。十数年前まではこの町家通りは生活道路で、観光客はほとんど歩かない通りだったとのこと。

多くの店が閉店し、住む人も減ってきた中、「この通りをもっと盛り上げよう」という動きが始まり、「町家通り」と名付け、看板や灯籠を作った。

「今のにぎわいを取り戻せたのは、通りに存在する歴史の蓄積と、そこに住む人たちの情熱です。町内の人たちが知恵を出し合って取り組んだことが大きいですね」と晴督さん。

「町家通りの女性は活発ですから」と素子さん。「訪れた人の気持ちになって、時には友人のように接します。景色だけではなく、触れ合いを通して、この通りの空気を感じてほしいですね」と二人は声を揃える。

現在の判じ絵は、ギャラリーを利用した人がボランティアで書かれているとのこと。4カ月ごとに張り替えるそうで、「静かな通りをやさしく照らす灯籠をこれからも続けていきます」と語ってくれた。



昼には昼の、
 夜には夜の、
 通りの顔がある

おもてなしのカタチ

1

裏通りから発信
 宮島・町家通り

「灯籠」の
 やわらかな光と
 絵でおもてなし

観光客でにぎわう表参道商店街から一本奥にある町家通り。昭和30年代の面影を残す町並みや、江戸時代の建築様式を再現した風情ある商店が並ぶ。生活道であったこの通りを散策してもらえようと、「ひめあかり」と呼ばれる、昔から祭りの日に行われていた「灯籠」を常備した。数年前までは、地元の人しか通らなかつたこの通りが、今、新たな観光スポットとして注目されている。

町家通り

人々の暮らしが息づく通り

観光客でにぎわう表参道商店街から一本裏に入ると、その景色は一変する。その通りの名は、「町家通り」。約400mの通りの中に、人々の暮らしが息づく、古い町並みの情緒あふれる姿がある。江戸時代初期に埋め立てら

れた町家通り。宮島の歴史で最も華やかだったのはこの頃とされる。当時は本町筋と呼ばれ、終戦後しばらくまで宮島のメインストリートだった。しかし、戦後、高度成長期の観光ブームを迎えると観光客は表参道商店街に流れ、この通りは島に住む人たちの生活道となった。その通りが脚光を浴びるようになったのは近年のこと。

通りに住む人たちで「何かできないか」と考え、町家を舞台にした行事「雛めぐり」を始めた。それがきっかけとなり、通りに点在する江戸時代から戦前までの古い町家建築が注目され始めた。昔ながらの個人商店や民家に加え、伝統的な町家建築に現代的な感覚をプラスしたレトロモダンな商店なども登場。

いるものがある。軒先にかかる灯籠だ。夜は明かりを灯し、昼間とはまた違った情緒をプラスしている。もともとは、通りの近くにある神社で旧暦の8月15日に行われる祭りの際に捧げていた灯籠。それを祭りの日の一日だけではもったいないと、当初、町内の女性有志が集まって好きな絵を書き、約20軒が軒先に掲げた。

灯籠に「判じ絵」

その謎が解けますか？

8年くらい前から、この町家通りの名物の一つとなつて

現在48軒が参加している「灯籠」。通りを歩く人が楽しめるよう「判じ絵」が描かれている。夕暮れになると、約400mの通りには、明りが途切れることなく続き、そこに暮らす人々の息づかいや体温が伝わってくる。

判じ絵

さて、その絵は何と読むのでしょうか

判じ絵とは、江戸時代の大家の間で人気のあった、絵を使った一種のなぞなぞ。町家通りの48軒に掲げられている。

設置場所と、判じ絵の答えが掲載されたマップも作成されている。「言葉遊び」が描かれている判じ絵を見ながら、古い町並みをお散歩してみてください。

さて、何と読むでしょう。昔の国名です。答えは次のページの下にあります。



町家通り

「町家通り」とは、もともとの地名ではなく、平成12年、旧宮島町と宮島観光協会が街歩きマップを作製した際に命名。昭和30年代の面影をそのまま残すレトロな町並みの生活道。平成10年ごろから、町家風の建物が次々と誕生。宮島の新たな観光スポットとして注目を集めている。